

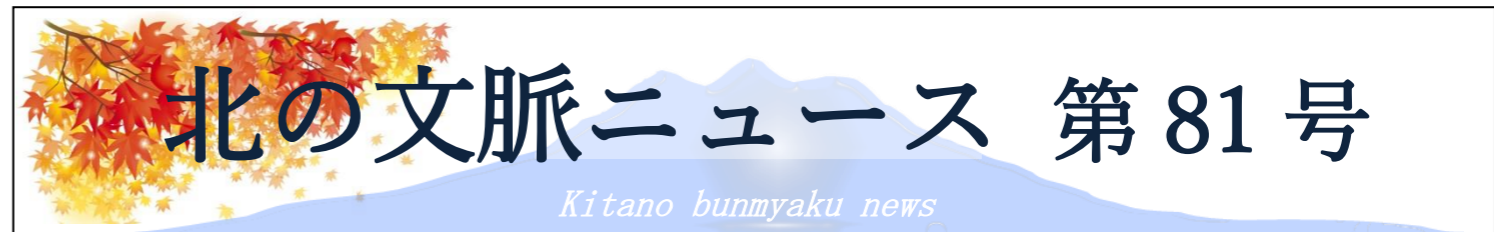
地方文学探究の軌跡

青森県出身の文学研究者の先達に、柳田泉（1894～1969・弘前市）と板垣直子（1896～1977・五所川原市）がいるが、その流れは小山内時雄（1915～2006・弘前市）に至り〈地方〉に向けられる。青森県郷土作家研究会の創立は、昭和 34（1959）年 1 月 13 日。同年 10 月創刊の機関誌『郷土作家研究』に、代表理事の小山内は次のように書いている。「これまでの文学史は中央偏重のあまり、地方文学と地方作家をなおざりにして来た。これへ新しい探求の目を向けることは、文学史の底辺を闡明することであり、ひいては近代日本文学の歴史的な背景を認識することにも繋るものである。」（「創刊の言葉」）。

現在開催中のスポット企画展「青森県郷土作家研究会 60 周年」では、同会の地方文学探究のあゆみを小山内

時雄、小野正文ら研究会員の著作を通して紹介している。「私が郷里に在住することになって、青森県出身の作家研究を手掛けようとした当初、第一に感じ、困惑させられたことは、その基礎的調査研究が皆無であったことである。」（小山内時雄『近代諸作家追跡の基礎』）。「今後推進されるべき青森県の文学史の集大成のために『北の文脈』の占める役割は、必ずしも、大きなものではないにしても、いささか起点としての意味をもたせたいと考える。」（小野正文『北の文脈 青森県人物文学史』上巻）。

これら著作の序文・跋文から、「基礎的調査研究が皆無」の出発点から「青森県の文学史の集大成」という到達点までの構図が見えてくる。創立時の会員は、今や「伝説の研究者」となりつつあるが、これらの礎のもとに弘前市立郷土文学館もある。当館は来年、開館 30 周年の節目を迎える。 **（企画研究専門官 櫛引洋一）**



第 43 回企画展「太宰治生誕 110 年記念展」記念講演会

「太宰治と津軽・弘前」 講師:安藤 宏 氏(東京大学教授)

第 43 回企画展「太宰治生誕 110 年記念展」の記念講演会が 8 月 17 日、弘前市立観光館・多目的ホールで開催された。講師の安藤宏氏は東京都出身で、近代文学研究を専門分野とし、太宰研究の第一人者として知られている。講演では、太宰治の旧制弘前高校時代のノートと、弘前のモダニズム文化を中心に取り上げた。

安藤氏は津軽に何度も足を運び調査研究し、師事した小野正文氏との思い出を語る。今から 30 年前、初めて小野氏と会った際には、太宰と親しかった人物と話すのが初めてだったためとても緊張、感動したという。待ち合わせ場所のラグノオは菓子店だけでなく、大正期に弘前で発足したパストラル詩社のモダニスト詩人が集まるなど、津軽文化・モダニズム文化を象徴するサロンでもあった。



安藤 宏 氏

太宰が旧制弘前高校に在籍していたのは昭和 2 年 4 月から 5 年 3 月の 3 年間で、弘前が一気にモダニズムに染まっていく時期であった。安藤氏は、弘前で最先端のモダニズム文化に触れた体験は太宰にとって大きかったであろうとした上で、「旧制弘高時代のノートからは、高校生活や当時の弘前の様子が窺える。現存する太宰の直筆資料の最後の宝庫なのでは」と語った。

旧制弘高時代の太宰は、地方都市の東京化が一気に進む現象の中にいた一方で、義太夫、芸者遊びと江戸趣味に走っていた。当時の弘前は義太夫が盛んな町であり、化学のノートには小山初代と遊んでいた自分をイメージした落書きが描かれている。旧制弘高時代の太宰に関する従来の研究では、太宰の義太夫、芸者遊び、江戸趣味が重視されており、映画が太宰に与えた影響はほとんど注目されてこなかった。

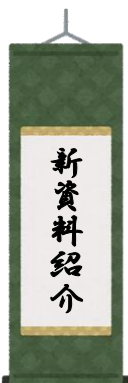
しかし、1 年時の英文読解のノートからは、世界最先端のモダニズムの象徴であったハリウッドとドイツ映画が若い太宰の中で結びついていることが読み取れる。さらに、弘前大学研究チームの中國美穂氏（日本史研究家）は、ノートの落書きからドイツの表現主義との関連を調査している。たとえば、弘高時代の修身のノートに繰り返し書かれた Conrad の文字や、太宰の自画像だと思われていた奇怪で暗い男性の顔は、ドイツ映画を代表する名優コンラート・ファイトのことだと述べている。ノートに描かれた画は大部分がコンラート・ファイトと太宰との重なりを感じさせ、安藤氏は、コンラート・ファイト主演の映画作品の題材から、「太宰は、本来の自分とは違うもう一人の人格を持った自分がいる、というイメージに異様に惹かれた形跡がある」との見解を示した。

この後、戦時体制への移行に伴い、弘前におけるモダニズムはわずか数年間であったが、この時期の弘前が太宰に及ぼした影響や、弘前で太宰が何を吸収していたか、何に出会っていたのかを裏付ける資料の一つがこのノートである。

安藤氏は、「東京では画家、詩人、小説家など分業化が進んでいた一方、津軽では異なるジャンルのものが互いに交流し合い、古さと新しさが異様な時点で結びついていた。それこそが津軽という土地の潜在的なパワーであり、そこから太宰や棟方志功のような世界に名を馳せる人々が登場した」と指摘する。

最後には、小説『津軽』の「隠沼」こそが津軽の奥深さを表す言葉であるとし、「ひっそりと、しかもしたたかに奥深く抱え込んでいく包容力。いろいろなものを吸収する、けれど唯々諾々と従うわけではなく、しっかり反骨心も持っている。反骨心を持ちながら、いろいろなものを同居させてゆく奥深さ。それが、東京生まれ、東京育ちの人間からみた津軽文化の魅力である」と語った。

当日は、たくさんの方にお越しいただき、ありがとうございました。

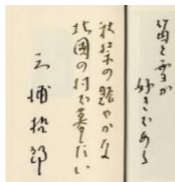


『岩木山を科学する 3』
北方新社 平成 31 年 3 月 20 日刊



P5～P15 には「岩木山と郷土文学（近代）」と題して当館の櫛引洋一が寄稿しています。津軽を来訪した文人、津軽出身の文人が執筆した岩木山の数々を紹介しています。

『白夜を旅する人々』 三浦 哲郎 著
新潮社 昭和 59 年 10 月 25 日刊



署名入り
「笛と雪が好きである
秋祭の賑やかな北国の
村で暮らしたい」
三浦哲郎



無料開放 令和元年 6 月 29 日（土）～7 月 1 日（月）

今年も「郷土文学館開館記念 無料開放」が行われ、多くの来館者でにぎわいました。ワークショップ「消しゴムハンコを押して太宰治の『細胞文藝』を作ろう」では、楽しみながらオリジナル『細胞文藝』を作り、「ミニ掛け軸を作ろう」では、かわいらしい掛け軸がたくさんできました。

また、ラウンジライブでは「ゆうさん」による紙芝居と、「弘前大学アカペラサークル V.E.L」によるアカペラ演奏が行われました。紙芝居は、小泉八雲の「稲むらの火」を実演し、参加者と防災について学びました。アカペラは、「もののけ姫」ほか全 7 曲の歌唱を行いました。

来年は開館 30 周年です。楽しい企画をご用意して、皆様のご来館をお待ちしております。



無料開放の様子

お知らせ

当館の前（悪天候時は風除室）にブラックボードを設置しています。文学館のお知らせや季節の俳句などを紹介していますので、近くにお寄りの際は是非ご覧ください。

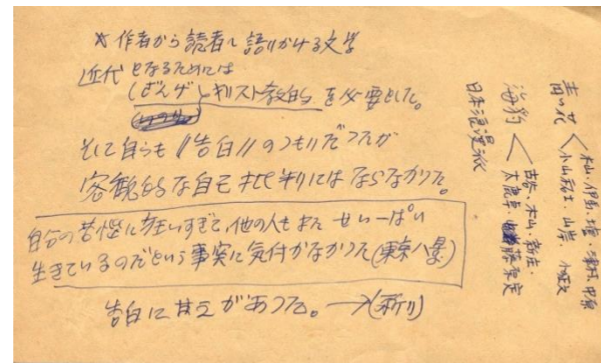
スポット企画展 「生誕 110 年 今官一と太宰治の交流」

平成 31 年 4 月 1 日～令和元年 6 月 20 日

今官一と太宰治は同じ明治 42 年に青森県で生まれ、今年で生誕 110 年を迎えた。本展では、深い絆で結ばれた今官一と太宰治の交流の軌跡と、今官一の文業をダイジェストで紹介した。

官一が第一早稲田高等学院、太宰が官立弘前高校に在学していた昭和 2 年の夏、弘前に帰省した官一は、創刊を計画していた同人雑誌に太宰を勧誘するが断られる。これが、生涯にわたって交流する 2 人の出会いであった。断られた官一だったが、昭和 8 年、古谷綱武らとともに同人雑誌『海豹』を創刊する際に太宰を紹介し、無名の太宰に難色を示す同人たちを説き伏せて作品を掲載させる。太宰も官一宛の書簡に「君の太宰論は信頼してあます。君自身、太宰なのだから」（昭和 11 年 6 月 23 日付）、「君を信じ、敬ふ」（昭和 11 年 10 月 4 日付）と書くなど、2 人の交流はますます深いものとなっていく。戦時中には、出征した官一から未発表の原稿 500～600 枚を太宰が預かり、三鷹、甲府、金木と戦火の中を守り通したというエピソードも残っており、太宰の死後、官一が命名した「桜桃忌」の愛称は現在もお広く知られている。

本展では官一の著書や色紙の他に「今官一自筆構想メモ」も展示。メモには「ダス・ゲマイネ」「斜陽」といった太宰作品のタイトルや、「青い花」「海豹」などの単語が確認できる。また、太宰から読者へ語りかける「告白の文学」に対しては、「客観的な自己批判にはならなかった」「告白に甘えがあった」と厳しい評価を下したとみられる記載もあり、官一が太宰の没後も太宰の文学について思索する様子が見えてくる。

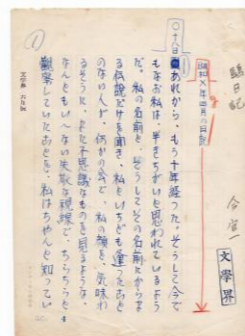


今官一自筆構想メモの一部

「鷗日記と辻音楽師」

スポット企画展「今官一と太宰治の交流」では、今官一が原稿「鷗日記」も展示した。「鷗日記」は太宰治の小説「鷗」（昭和 15 年 1 月）をもとに、官一が脚色して書いた架空の太宰治日記である。『文学界』（昭和 31 年 6 月）の特集「日記に於ける作家の研究」に掲載され、その際には「- 架空〈太宰治日記〉 -」のサブタイトルがついている。原作の「鷗」は、太宰が「唾の鷗」に託して芸術論を披歴した作品である。「小暗い露地で、一生懸命ヴァイオリンを奏してゐる、かの見るかげもない老翁の辻音楽師を、諸君は、笑ふことができるであらうか」と自らを年老いた「辻音楽師」に重ね、太宰が芸術家としての自負を表明している箇所は、「鷗日記」にはほぼそのまま使われている。このように、「鷗日記」は太宰の原作「鷗」の「言葉と思想」を用い、官一の手で再構成されたものである。「昭和 14 年から死ぬまで、彼は、このような日記を書きつづけ、いまでも書きつづけていると考えてさしつかえない」との「筆者註」に、太宰の理解者としての自信のほどがうかがえる。同時に、官一は「ただ、成否を本人に聞けなくなった現実を、ふりかえって哀しいと思うだけである」と書き、太宰の死を悼んでいる。この作品は、のちに『わが友 太宰治』（津軽書房、平成 4 年）に収められた。

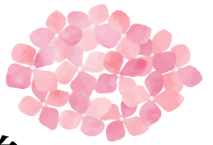
なお、「辻音楽師」は太宰の「善蔵を思ふ」（昭和 15 年 4 月）にも登場しており、「私は一生、路傍の辻音楽師で終るのかも知れぬ。馬鹿な、頑迷のこの音楽を、聞きたい人だけは聞くがよい。」との記述がある。



今官一原稿「鷗日記」



北の文脈文学講座



太宰治ゆかりの建物を巡る旅 ～碧雲荘をめぐる～

日時：6 月 15 日 講師：世良 啓 氏（文筆家）

講師の世良氏は、太宰治が住んだ碧雲荘の保存のために開かれた第 1 回太宰治サミット(2015 年東京・杉並にて)がきっかけで、三鷹、船橋、大宮など県外の太宰ゆかりの地を巡る旅の始まりとなった。本講座では文化的価値と経済的価値の共存の難しさを改めて考えさせられる、碧雲荘の現在を紹介した。

碧雲荘は太宰が 1936 年 11 月 15 日から約 7 ヶ月間、初代と暮らし、ここで「HUMAN LOST」（「人間失格」の原型）が書かれた。建築的にも価値のある、現存する数少ない和洋折衷建築。太宰の杉並時代を象徴する場所として残したいと、2014 年から「荻窪の歴史文化を育てる会」が保存運動を展開するも 2016 年 2 月解体、大分県湯布院に移築され「ゆふいん文学の森」に。跡地には杉並区複合施設が建ち、敷地の片隅に碧雲荘の「案内板」、4 階に「太宰治と碧雲荘」のパネル展示コーナーがある。



7 月 7 日
「太宰治コントセレクション」
出演：津軽カタリスト

ラウンジのひととき



5 月 4 日
「マンドリン&ギターコンサート」
出演：古川里美、今井正治

太宰文学と弘前

日時：7 月 20 日 講師：相馬 明文 氏
(秋田看護福祉大学非常勤講師)

講師の相馬氏は大学在学中より太宰文学の研究を始めて今日に至る。テーマは太宰治の小説(太宰文学)と弘前との関係についてとし、太宰の人ではなく、小説に焦点を当てる。

太宰治の官立弘前高校時代、太宰文学の文学的テーマは「生死・自殺未遂」「故郷・生家とその確執」「裏切り・非法思想との関わり」の 3 つである。当時の初期小説群にすでに描かれ、太宰作品全体における一貫したテーマでもある。また実生活では薬物乱用も行われ、作家として非常に重要で大きな意味を持っている出発の時期となった。

相馬氏は、夏目漱石の「暗い漱石」文学を例に、世間では「明るい太宰」を取り上げられることが多いが、「暗い太宰」が文学において重要な要素であると述べた。



8 月 3 日
「『津軽の詩』より」
出演：語る会
みつはしみなこ

